



令和2年度

新町支石墓群講演会予稿集・資料集

# 弥生文化の はじまりと 新町支石墓群

ごあいさつ ..... 2

講演  
北東アジアの中の新町支石墓群 ..... 3

西谷 正 (糸魚市立伊都国歴史博物館名誉館長)

資料  
新町支石墓群の調査成果とその特徴 ..... 12



## ごあいさつ

糸島市は3世紀の歴史書『魏志倭人伝』に登場する「伊都国」が所在したと考えられる故地で、古来より中国・朝鮮半島との積極的な交流が展開され、当時の政治・経済・外交の拠点としてわが国の文化・国家形成に重要な役割を果たしてきました。

その国家形成が始まるのが弥生時代です。弥生時代は日本国内で稲作農耕を基幹とする食糧生産活動が行われ、これを基盤とする生活が行われた時代ですが、その稲作は朝鮮半島から北部九州に伝えられたことによりはじまります。それらは遺跡でも確認されており板付遺跡や菜畑遺跡で水田、曲り田遺跡で住居跡、そして今回テーマとする新町支石墓群では支石墓や壘棺墓が確認されています。

昭和61年(1986)に新町支石墓群が初めて発掘調査されたとき、大陸に由来する墳墓である支石墓の確認や副葬小壺の出土に加え、日本で初めてとなる弥生時代早期の戦死者の人骨などの発見で大きく注目を浴びました。

その後、平成12(2000)年に国史跡に指定され、史跡の公有化を進めるとともに、令和元(2019)年度には史跡の保存と活用の基準となる「国史跡新町支石墓群保存活用計画」を策定し、史跡整備を計画しています。

そこで、史跡整備に向けた事業の一環として、西谷正先生をお招きして「北東アジアの中の新町支石墓群」と題した講演会を開催し、その内容を映像で記録し、ひろく一般に公開することになりました。これらを通じてわが国における新町支石墓群の重要性を再認識していただき、多くのおみなさまに当市の歴史の奥深さを楽しんでいただければ幸いです。

令和3年1月22日  
糸島市教育委員会  
教育長 家宇治 正幸



## 北東アジアの中の新町支石墓群

糸島市立伊都国歴史博物館  
名誉館長  
西谷 正

### I 世界の支石墓

世界の新石器時代から初期鉄器時代にかけて分布する巨石墳墓の一種である。フランス北西部に数多く知られた、この種の墳墓に対して、ブルトン語で卓または机と、石をそれぞれ意味するdol(table)、men(stone)すなわちdolmenドルメンの用語が広く使われている。それに対して北東アジアでは、中国の石棚、朝鮮のコインドル(古人石)もしくは支石墓、そして、日本の支石墓と呼称が異なる。ふつう4個ないし6個の支石(撐石)を立てて長方形の墓室を造り、その上に1枚の巨石を置いたものをいうが、時代や地域によって墓室の構造は多種多様である。巨石を用いた上石は、地上に露出しているのだから、あたかも墓標の役割も果たすが、原則として封土は見られない。イギリスやフランスでは、横穴式石室墳や巨石で構築した石室墳の墳丘が削平されて、石室だけが露出している場合がある(写真1)。また、横穴式石室墳がドルメンと呼ばれることもあるが、それは本来的な意味ではない。

支石墓はヨーロッパ北・西部、地中海沿岸から小アジア、インド南部、東南アジア、アメリカ、そして、東アジアと世界各地に広範囲に分布するが、それら相互の間に因果関係がすべてあるわけではない。

そのうち、東アジアでは主として、中国大陸の東北地方から朝鮮半島を経て日本列島まで分布し、いわば北から南へと伝播していった様子がうかがえる。とくに朝鮮半島で顕著に発達したが、西南部の支石墓の分布密度は世界最大級である。日本列島では、北部九州に濃密な分布が認められる。

### II 北東アジアの支石墓

#### 中国大陸

中国では、長江下流域つまり揚子江流域に当たる浙

江省や、山東半島の先端付近でも少し認められるが、分布の中心は東北地方にある。ここには1966年段階で100遺跡316基の支石墓が確認されている。それらは、遼河以東の吉林省南部から遼東半島の遼寧省にかけて、主に丘陵地帯に分布する。ここでは花崗岩に加工を施した巨石で、地表面に墓室を造り、上石を載せたテーブル(卓子)形(北方式)が多い(写真2・5)。その中には、上石が非常に大きいものが見られる(写真3)。また、花崗岩の自然石や板材を利用して、地下に小型の墓室を造って、地表に低く上石を置くという形式が認められる(写真4)。この場合、石蓋石棚(石棺)墓とも呼ばれる。同じように、埋葬施設が石棚(石棺)でなく土壇で石蓋土壇墓と呼ばれるものも知られる。両者の関係については、支石墓から石蓋墓への変遷がたどられる。支石墓の内部からときどき人骨片が出土するが、しばしば火葬されたものである。

副葬品は少ない方で、まれに土器・磨製石器・多頭石斧・紡錘車などが検出される程度である。年代に関しては、ほぼ春秋時代(B.C.770～403)並行期とする考え方があ

る。中国大陸では、山東半島や長江下流域(揚子江流域)にも、支石墓がわずかながら認められる。そのうち、後者の揚子江流域の場合、上述したとおり世界各地で知られるので、東北地方との関連性を求める必要はない。同じように、日本列島の支石墓との関係も、随伴する他の文化要素が認められないことから、あえて両者を結びつける必然性があるわけではない。因みに、揚子江下流域で支石墓といわれるものの中には、石室墳を誤認していることがあるように思われる。

#### 朝鮮半島

朝鮮半島で支石墓は、無文土器(青銅器)時代の代表

的な墳墓の一つに挙げられる。そして咸鏡北道などごく一部の地域を除いて、ほぼ全地域に分布するが、その中でも全羅南道や平安南道はもっとも濃密な分布地域として知られる。支石墓の形態や構造も複雑で、地上に4枚の板石を立て、平面を長方形の箱形に組み合わせた石棺状墓室に、巨大な板石で上石を載せた、いわゆるテーブル形は北部地方に多い(北方式)(写真6・7)。この形式は、朝鮮の中・南部の西海岸地域へと伝播している(写真8・9・10)。同形式のものが、前述のように隣接する中国の東北地方に多く分布するところから、朝鮮の支石墓の起源は中国の東北地方に求められよう。そして、地上には巨石だけが目立つのに対して、地下に埋葬施設を造る、いわゆる碁盤形は南部地方に多い(南方式)(写真12・13・14)。碁盤形は中部西海岸地域の江華島で見られ、この形式の分布上の北限に当たる(写真11)。地下の埋葬施設には、石棺・石室・土壙(写真15)などがある。西南部地方の済州島の地域特色を示すものとして、上石の下が石囲い状になっている(写真16)この上石の上面には性穴(cup mark)(写真17)が見られるが、日本では珍しく糸島市の井田用会支石墓において見られる(写真18)。そのほか、いくつかの埋葬施設と、その周辺の積石が連接して、一定の墓域をなしている場合や、さらにそこに巨石を置く場合なども、まれには認められる。20数年前に、朝鮮北部の平安南道の龍山里1号支石墓では、中央に大きな墓室と、その周囲に10基の小型墓室からなる特異な支石墓が調査され、30余体の人骨が出土した。この支石墓に対して、奴隷主と奴隷の殉葬墓とする見解が示されている。

朝鮮半島では、全体として、地上に高く威容を誇るテーブル形(北方式)が年代的に古く、それがそのまま地下に入るようになった碁盤形(南方式)が新しい。支石墓の内部からは、ときどき磨製の石剣や石鏃が出土する。無文土器や銅剣・銅矛などの青銅器のような出土遺物はきわめて稀にしか見つからない。テーブル形の支石墓は規模が大きく、また、数量も少ないので、そこに集落内部でも特定の被葬者を想定できよう。それに対して、碁盤形の支石墓は小規模化するとともに、数量も膨大なものになり、その背後に築造者の階層が広範化したことがうかがえる。とはいえ、慶尚南道の徳川里1号支石墓のように、石築の広大な墓域の

中に1基の支石墓が築かれて、あたかも集団の中での首長墓のようなものも知られる。

朝鮮の支石墓は、上述したように縄文時代晩期後半(弥生時代早期)の稲作文化開始期に日本の北部九州北西部に伝播した。その後、弥生時代中期後半まで、北部九州を中心に、一部は南部九州まで分布するようになった。その数量は、初現地である中国の東北地方のそれをはるかに凌駕する。日本の支石墓は、いずれも碁盤形であるが、朝鮮のものに比べて小型化している。地下の埋葬施設には、石棺・土壙に加えて、木棺・甕棺が見られることは大きな特色である。日本の支石墓が、当初は、朝鮮からの渡来集団が築いた墳墓であったものに対して、終末期には在地性の強い大形甕棺墓群の中にあって、ごく一部で標識的に巨石が置かれるといったように、変容が認められる。

#### 日本列島一分布と変遷

日本列島の支石墓は、弥生文化形成期の北部九州を特徴づける墓制の代表的なものである。いうまでもなく、巨大な上石を数個の石塊で支えるところから、支石墓と呼ばれる。上石の下部に設けられた埋葬施設として、土壙・木棺・甕棺・配石などがある。支石墓は、縄文時代晩期後半(山ノ寺式土器)から弥生時代中期後半(須玖Ⅱ式土器)まで知られる。埋葬施設の土壙は全期間にわたって認められるのに対して、古い時期には木棺・石棺が、そして、新しい時期には甕棺が、それぞれ多い傾向が見られる。

縄文文化終末期(弥生時代早期)の支石墓は、佐賀県の唐津平野・佐賀平野、福岡県の糸島地方や長崎県の西北海岸部・島原半島などにもっとも多い。弥生時代前期から中期にかけては、内陸部へと分布が広がり、福岡平野・筑後平野や熊本県の菊池川流域、さらには鹿児島県の薩摩半島まで知られるようになる。最近、沖縄県宮古島の城辺町で支石墓が30基以上も見つかったと報じられた。そして、中国大陸の福建省にもあるとして、南方からの渡来ルート説まで出される<sup>1)</sup>。しかし、仮りに支石墓であるとしても、沖縄本島における弥生土器の出土などから考えて、やはり南九州からの伝播として考えるべきであろう。

ところで、九州でこれまでに支石墓の存在が確認されていないところに大分・宮崎の両県がある。そのう

ち、大分県に関しては、豊後大野市の平石遺跡が問題になる。ここでは土壇墓2基を含む15基の埋葬遺構が調査されたが、ほとんどが弥生時代前期の甕棺墓である。ここにはかつて巨石が3つあったといわれ、そのうちのひとつが遺存している。このことから、支石墓のような墓が形成されていた可能性<sup>2)</sup>が指摘されている。その他、安心院盆地にも支石墓の上石を思わせる巨石が見られるなど、大分県内における支石墓の存否問題は今後とも検討課題である。

一方、九州の隣接地域では、本州西端の山口県も問題である。ここは、弥生時代前期に朝鮮半島と関連がある遺跡や遺物が少なからず知られるところである。その点で、山口県下関市にある中ノ浜遺跡の支石墓は、土壇を埋葬施設とする弥生時代前期の数少ない例<sup>3)</sup>として重要である。

さて、支石墓の存在形態を見ると、他の墓制のようにあまり大規模な群集を見せず、せいぜい数基ないし十数基であることが普通である。また、上述のように、埋葬施設に種々の形態があるとはいえ、他の墓制と混在することは少ない。福岡県大牟田市の羽山台遺跡C地点では<sup>4)</sup>、土壇墓3基、木棺墓2基、甕棺墓3基とともに、支石墓1基が混在し共同墓地の中の小グループを形成している。この支石墓の埋葬施設は甕棺であり、年代的にも大形甕棺墓が盛行する中期初頭の時期に入っている。

支石墓の埋葬施設には、副葬品を持つものは少ない。弥生時代前期に当たる福岡県糸島市の志登支石墓群(写真19)の8号支石墓の磨製石鏃などは数少ない顕著な例である。中期の須玖岡本遺跡のように、支石墓下部の甕棺からは、30面内外の前漢鏡やガラス璧とともに、銅剣・銅矛・銅戈など大量の副葬品を出土したが、むしろ例外的な質量といえる。また、構造的には、支石墓といっても、もはや本来のそれからかけ離れて、たぶんに標識的なものになってきている。支石墓の中には、弥生時代中期に入ると、佐賀県唐津市の葉山尻1号支石墓のように、上石の直下に2基と、その周辺に4基の合計6基の甕棺があって、あたかも6基の甕棺からなる家族墓と、その標識としての上石という性格を示すものなどが現れる。

つぎに、支石墓の埋葬施設の構造によって型式分類を試み、合わせてその系譜についても<sup>5)</sup>若干の考察を

行うことにする。

〔I型式〕〔石棺型〕 I型式は、上石の下部に小型で、平面が方形に近い石棺を埋葬施設としたものである。上石は支石(撐石)によって支えられ、その下に蓋石を持った石棺がある。代表的な遺跡として、長崎県の狸山遺跡5号支石墓を挙げることができる。上石は長さ1.3m、幅1m、厚さ約20cmの方形に近い小型のもので、8個の支石によって支えられている。その下に、長さ約60cm、幅約40cm、深さ約40cmの方形に近い小型の石棺が埋設されている。上石の下の支石群の間から、供献用と見られる刻目突帯文土器の小形壺の細片は出土している。この種のもは、近くの大野台遺跡でも知られるほか、同じく長崎県の原山支石墓群や、さらには佐賀県の瀬戸口支石墓群などで知られる。

原山支石墓群D群1号支石墓のように、コ字形の石囲いを持ったものも石棺の粗雑化したものと考えられるが、ここでは明確な支石を持たず、貼石状の積石のうちのやや大きいものによって支えられているという状態であった。しかもこの場合、石囲いの内部に、合わせ口の小児用小形甕棺を埋めている点に大きな特色がある。同じく原山支石墓群C群3号支石墓では、整然とした石棺ではなく、楕円形の石囲いを埋葬施設とするものが見られる。この石囲いは、6枚の側石からなるが、薄い蓋石で覆われた上に礫が覆われ、そして、その上部に支石で支えられた上石が載っている。

また、福岡県の小田遺跡2号支石墓のように、石棺の側壁に直接、上石が載る場合があり、I型式の変形といえよう。

I型式の支石墓は、ほとんどが縄文時代終末期のいわゆる刻目突帯文土器の段階のものであるが、長崎県の井崎遺跡のように弥生時代前期にも認められる。

〔II型式〕〔土壇型〕 上石の下部の埋葬施設が土坑の場合である。土坑の形態は、平面が円形あるいは長楕円形であることが多い。縄文時代終末期のものとしては、原山支石墓群の34号支石墓がある。ここでは、土壇の上に薄い板石で蓋をしていた。長崎県の風観岳遺跡と佐賀県の岸高遺跡は同時期のものである。佐賀県の五反田・葉山尻両遺跡の支石墓のように、弥生時代前期に多い。

〔III型式〕〔木棺型〕 糸島市志摩新町の新町支石墓群(写真20)の支石墓群の中に、木棺を埋葬施設とする

ものが含まれている。

〔Ⅳ型式〕〔壘棺型〕 支石墓の埋葬施設として、小形壘棺を使用する場合も少なくない。原山支石墓群では、幼児用の小形壘棺を埋設するものが早くから知られている。この傾向は、弥生時代前期に入っても続く。たとえば、佐賀県の瀬戸口遺跡などが知られる。さらに、前期末から中期初に大形壘棺が盛行しはじめると、支石墓の壘棺も大形化する。福岡県の羽山台遺跡などがある。壘棺は単一の場合と、複数の場合があるが、後者の場合は複数の壘棺群の上部に、いわば標識的に上石が置かれることがある。この種のもは中期に限られるが、佐賀県の葉山尻遺跡1号支石墓のように、上石の直下とその周辺の6基の壘棺を伴っていた。

〔Ⅴ型式〕〔配石型〕 上石の直下に配石を行う場合で、熊本県の藤尾遺跡などが挙げられる。配石の内部が土坑であったり、幼児用の小形壘棺であったりする。年代的にも弥生時代中期後半といわれるので、支石墓の最終末の型式であろう。

以上のように、日本列島の支石墓の諸型式を概観したが、その年代と分布の関係を総括しておこう。まず、日本にはじめて支石墓が出現するのは<sup>6)</sup>、縄文時代晩期後半の山ノ寺式もしくは刻目突帯文の土器の段階である。ごく初期の支石墓は、第Ⅰ型式(石棺型)つまり小型の箱式石棺を埋葬施設とするものが大半である。その中には、原山支石墓群のように、土壇・壘棺・石囲いを持つ支石墓と混在するものがある。現在のところ、この型式の支石墓はほとんどが長崎県に属し、それらも北松浦・西彼杵・島原半島に及ぶ、西北九州に分布の中心がある点が大きな特色となっている。第Ⅲ型式(木棺型)もこの時期に登場するが、福岡県の新町支石墓群のように分布が限定的である。

弥生時代前期に入ると、第Ⅱ型式(土壇型)の支石墓が主流を占めるようになる。第Ⅰ型式や第Ⅳ型式(壘棺型)も、この時期に見られる。縄文時代晩期後半期の支石墓の東南限に当たる原山支石墓群は、支石墓が西北から東南方へ伝播したと考えれば最も新しい時期になるが、そこで第Ⅰ型式に加えて第Ⅱ型式や第Ⅳ型式が出現するのは、分布の東南限と年代が最も新しいという観点から理解できよう。そうすれば弥生時代前期に原初的な第Ⅰ型式が残存し、後出的な第Ⅱ・第Ⅳ型式が新たな展開を見せることも容易にうなづけ

よう。第Ⅱ型式の支石墓は、第Ⅰ型式とは分布圏を異にし、玄界灘に面した佐賀県の唐津平野や、福岡県の博多湾沿岸部に多い。弥生時代前期でも末になると、これまでの小形の小児用壘棺に代わって、埋葬施設が大形の成人用壘棺へと変遷する。この傾向は中期中葉まで継続していく。このような大形壘棺を埋葬施設とする第Ⅳ型式にいたって、支石墓の分布は拡大し、福岡県で筑後平野の内陸部にまで知られるようになる。弥生時代中期の前半には、遠く鹿児島県の薩摩半島にまで分布するようになる。すなわち、鹿児島県の入来遺跡では、第Ⅱ型式の土壇を埋葬施設としたと思われる支石墓が認められる。第Ⅴ型式は、支石墓としては大きく変容した構造で、弥生時代中期後半ごろに、各地に波及する過程で生まれたものと考えられよう。

さて、日本の支石墓の系譜とその背景を考えると、初期の支石墓が主として箱式石棺を埋葬施設とし、また、その分布が西北九州に集中的に見られる点が示唆的である。この時期の支石墓には、壘棺を埋葬施設とするものもあって、日本独特の型式となっているが、箱式石棺や土壇を埋葬施設とする支石墓は、朝鮮半島でもしばしば認められるところである。ただ、箱式石棺の場合、小型で方形に近い平面形をなす点は日本独特である。

朝鮮において、縄文時代終末期の第Ⅰ型式(石棺型)の支石墓の相型を求めると、黄海北道から全羅南道にかけて、それも中部以南の西南部地方に類似したものが認められる。西南部地方ではまた、箱式石棺や土壇の上縁周囲には貼石を置く場合も見られる。そのような構造は、長崎県の原山遺跡C群3号支石墓のそれと通じるものがある。この3号支石墓の埋葬施設は、6枚の側石を使った楕円形の石囲いであるといわれる。これとよく似た構造のものは、済州島の済州市吾羅洞のA地区10号支石墓に見出せる。ここでは楕円形に囲まれた11枚の側石が上石を直接受けている。このように見てくると、日本で最初に出現する支石墓は、構造的に見て、朝鮮の西南部地方との関連性が考えられるのである。

ここで問題になるのは、支石墓の伝来に関して、朝鮮の東南部から対馬・壱岐を経て西北九州に至るルートと、西南部から済州島を経て西北九州に至るルートが想定される。前者のいわば北方ルートは、縄文時代前

期以来相互に交流を持った舞台であるにも拘らず、第Ⅱ型式の支石墓がそこにはほとんど見られないという難点を示している。一方、後者のいわば西方ルートは、先史時代の航海技術からいって困難であることと、西方ルートにおける当時の交流を物語る物証に欠けるという難点がある。したがって、大局的に見て、日本の支石墓は、朝鮮の西南部から東南部地方を経由する、北方ルートを経て、西北九州にまず伝来したと考えておきたい。

弥生時代形成期の支石墓は、上述したように、北部九州の沿岸部に見られ、唐津平野から一方は福岡平野へ、他方は佐賀平野へと伝播したことが考えられる。そこでは、朝鮮では見られない第Ⅲ型式が縄文時代終末期以来継続するが、第Ⅱ型式の土壌を埋葬施設とするものが増える。この型式の支石墓は朝鮮の東南部には多く見られるもので、第Ⅱ型式の支石墓の祖型が東南部にあることを物語っている。このことは、たとえば福岡県の志登支石墓などで、朝鮮の東南部で特徴的な有蓋式磨製石鏃などの舶載品を副葬していることからもうかがえる。弥生時代前期の墓制には、支石墓とともに、箱式石棺墓や配石墓なども認められる。箱式石棺墓は対馬北端の長崎県・泉遺跡をはじめとして、響灘から周防灘にかけて沿岸地方に見られる。そして、配石墓も北部九州から中国地方西端部にわたって分布する。これらの墳墓の出土品の中には、朝鮮製の磨製石剣と磨製石鏃などを含み、また、同じく舶載の細形銅剣や多鈕細文鏡を副葬していて、やはり朝鮮からもたらされた墓制と考えたい。弥生時代前期の支石墓と箱式石棺墓は分布がわずかにずれているが、これは後者が若干遅れて伝播したからであろう。このような縄文時代晩期後半から弥生時代前期前半にかけて伝来した支石墓を母胎として、前期末以後に、日本独特の大形壘棺と組み合わさった支石墓が展開していったのである。

### Ⅲ 弥生文化と支石墓

#### (1) 稲作農耕文化の墓制

紀元前500年ごろ、縄文時代終末期(弥生時代早期)に始まった弥生文化は、よく知られるように、稲作農耕と金属器登場に象徴的に見られる技術革新の進展に特徴づけられる。

そのほかにも、土器製作技術の変化、木製鋸・鎌などの使用、石盾丁・石剣・石鏃など新たな磨製石器の出現、松菊里型竪穴住居・袋状貯蔵穴や環濠集落の営なみ等等、以前の採集経済を基本とする縄文文化に対して、画期的な文化を形成した。さらに、墓制においても、支石墓という特徴的な墳墓が築かれるようになった。

このように、日本の歴史上、生産経済の開始という一時期を画する弥生時代、とりわけ稲作農耕文化体系の構成要素の一つとしての墓制の特徴的な存在として、支石墓が位置づけられる。

#### (2) 支石墓の被葬者

ここで、これまで見てきた支石墓について、その伝来の背景を考えると、弥生文化形成期の一般的墓制と考えられる地下に営まれた土壌墓に比べて、地上に築かれた支石墓は特異なものである。しかも、朝鮮で盛行していたことと、墓制は民族や種族に本来固有なものであることを合わせ考えると、支石墓伝来の背景に朝鮮からの渡来人もしくは渡来集団の存在を想定すべきではなかろうか。つまり、縄文時代の終末期(弥生時代早期)に、まず西北九州に若干の渡来人あるいは渡来集団が定着し、支石墓を築いたと考えたい。続いて弥生時代前期に、北部九州の沿岸地方や、一部で中・南部地方へ、分布密度は地理的傾斜を示して減少しながらも、支石墓が築造されていったのである。

それにつけても渡来人・渡来集団に関する仮説は、出土人骨が検証の大きな手がかりとなる。その点に関して、1986(昭和61)年暮から翌年初にかけて実施された、福岡県の新町支石墓群の発掘調査の成果<sup>7)</sup>はきわめて重要である。新町支石墓群では、支石墓26基のうちから、合計10体の人骨が検出された。それに対して当時、九州大学医学部解剖学第二講座の中橋孝博・永井昌文両先生が形質人類学の立場から分析された。その結果、9号人骨では顔面部が低顔性であることが分かった。また、5体の人骨において風習の抜歯痕が認められた。さらに、計測可能な男性人骨3体の分析によると、いずれも推定身長が160センチ以下で、その平均は157.1センチと、かなり低身長であることも判明した。顔面部の低顔性、風習の抜歯、そして、低身長という形質的特徴は縄文人や、縄文人の特徴を

残した西北九州地方の弥生人に通じることである。この点で、朝鮮伝来の支石墓であるにも拘わらず、埋葬人骨は縄文人あるいは縄文人的ともいべき弥生人という分析結果を、いかに解釈するかという問題点が持ち上がる。一つの解釈は、縄文人が新来の渡来人から主体的に朝鮮起源の支石墓を受容したと考える。もう一つは、実は抜歯風習が朝鮮にあったが、その実例が未検出であるとする立場である。低身長という特徴に関しては、朝鮮の高身長という特徴の中の多様性もしくは変異性と理解することも可能性が残っている。いずれにしても、弥生文化形成期の人骨資料の絶対的な不足と、それにも増して朝鮮における同時期の比較しうる人骨資料の絶対的不足が問題である。

#### IV 日本の中の新町支石墓群<sup>8)</sup>

##### (1) 新町支石墓群の特徴

もっとも特筆すべきことは、弥生文化形成期、いい換えれば、縄文時代晩期後半～終末期(弥生時代早期)から弥生時代前期初頭にかけての時期の人骨が初めて検出された点である。そのことによって、前述のとおり、支石墓に埋葬された人物が縄文人に特徴的な形質を備えていることが分かった。

支石墓の地下の埋葬構造に関して、墓壇が整然とした直立立方体をなしていることや、墓壇底に木棺の棺台と思われる石が置かれていた点などから推して、木棺と考えられるものが含まれる点も注目される。

24号支石墓では、仰臥屈肢の姿勢で埋葬された人骨が検出されたが、その左大腿骨頸部に朝鮮系磨製石鏃の切先が嵌入していた。さらに、この人骨の足下には腰環が掘り込まれ、少年から若年にかけてと推測される2本の大白歯と上顎切歯片などが出土した。つまり、頭部が埋納されていたのである。腰坑で検出された人骨頭部については、橋口達也氏は集落間の衝突・抗争における犠牲者の首を取って、埋葬時に足下に埋めたと推定されている。そうであると、弥生時代後期2世紀後半の倭国大乱に先立って、戦いがあったことになり、社会発展史の研究にも接近できることになろう。

新町支石墓群は76基ほどの墳墓からなるが、支石墓はおおよそ26基ほどと推測される。支石墓は、縄文時代晩期後半～終末期から、弥生時代前期初頭にかけて営まれたため、重複して検出された。それゆえに、

一時期に支石墓が何基あったか明らかにはなっていない。それはともかく、弥生文化形成期を特徴づける墓制の一つ、支石墓の実像に迫ることができる稀有な遺跡といえる。

##### (2) 新町支石墓群の保存・整備と活用

前述のとおり、新町支石墓群の重要性から平成12(2000)年には国の史跡に指定された。それを機会に、改めて保存に万全を期することが再認識された。まず、保存を第一義的に考えながら、ついで史跡公園としての整備が課題となってくる。その上で、学校教育や生涯学習における学びの場として、あるいは、市内外の歴史とくに古代史に関心のある人々の歴史ロマンを楽しむ場などとして、活用されることが期待される。

そのような市民のもしくは国民的要請に答えるべく、糸島市では令和元年度に、文化庁の史跡等保存活用計画等策定費国庫補助金の交付を受けて、新町支石墓群の保存活用計画を策定した<sup>9)</sup>。今後その保存活用計画にもとづき、市民の関心・理解・協力を得ながら、着実に実現されていくことを期待する。

(2020.10.14)

##### 注

- 1) 1996年12月28日付「朝日新聞」。
- 2) 坂本嘉弘, 1993「東九州内陸部の弥生時代前期の様相」『古文化談叢』第30集(下), 971頁。
- 3) 国分直一ほか, 1970「中の浜遺跡発掘調査概報」。
- 4) 大牟田市教育委員会, 1975「羽山台遺跡—大牟田市所在羽山台C地点遺跡の調査—」。
- 5) 西谷正, 1980「日朝原始墳墓の諸問題」『東アジア世界における日本古代史講座』第1巻, 181～186頁, 学生社。
- 6) 森貞次郎, 1969「日本における初期の支石墓」『金載元博士回甲記念論叢』ソウル。
- 7) 志摩町教育委員会(橋口達也編), 1987「新町遺跡—福岡県糸島郡志摩町所在支石墓群の調査—」『志摩町文化財調査報告書』第7集。
- 8) 注7および志摩町教育委員会(橋口達也編), 1988「新町遺跡Ⅱ」『志摩町文化財調査報告書』第8集。
- 9) 糸島市, 2020「国史跡新町支石墓群保存活用計画」。

##### 参考文献

- 西谷正編, 1997「東アジアにおける支石墓の総合的研究」平成6年～8年度科学研究費補助金(基盤研究(A)(2))研究成果報告書, 九州大学文学部考古学研究室。  
太田新, 2014「日本支石墓の研究」海鳥社。





写真1 イギリス 1986年9月



写真2 中国・遼寧省白杏子 1997年5月4日



写真3 中国・遼寧省大荒地 1997年5月



写真4 中国・遼寧省粉房前 1997年5月3日



写真5 中国・遼寧省新金 1997年5月2日



写真7 北朝鮮・ピョンヤン郊外 2012年4月20日



写真6 北朝鮮



写真8 韓国・江華島

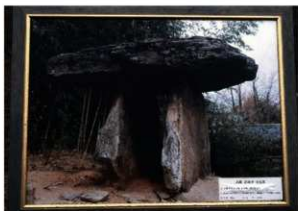


写真9 韓国・全羅北道高敞郡 1998年12月8日



写真10 韓国・全羅北道高敞郡 2007年10月8日



写真11 韓国・江華島横山里 2000年2月15日



写真12 韓国・全羅南道長川里 1996年8月27日



写真13 韓国・全羅南道和順郡 2011年12月8日



写真14 韓国・慶尚南道金海市亀旨峰 1976年9月6日



写真15 韓国・全羅南道羅州郡板村里 1976年9月2日



写真16 韓国・済州島和順里 2012年3月12日



写真17 韓国・済州島和順里 2012年3月12日



写真18 日本・糸島市井田(井田用会) 1984年2月1日



写真19 日本・糸島市志登(東から) 1984年2月1日



写真20 日本・糸島市志摩新町(西から) 1986年12月3日

## 新町支石墓群の調査成果とその特徴

### 1. 新町支石墓群の発見から今日まで

新町支石墓群は、糸島市志摩新町54番1他に所在する遺跡です。大正時代に中山平次郎氏により紹介され、土器散布地として知られた遺跡であり、地元では畑に露出した大石を「カンカンイシ」とよび、子どもたちの遊び場でした。

昭和61(1986)年に宅地開発を契機とする発掘調査を実施したところ、弥生時代早期の支石墓群が確認されました。国内初となる弥生時代早期の人骨が支石墓から出土し、縄文人的特徴を残すことで、全国的に注目された調査成果となりました。この成果を受けて、翌年の昭和62(1987)年に墓域範囲の確認調査を行い、弥生時代早期～中期にかけての墳墓群であることが明らかとなり、平成元(1989)年には支

石墓群の南側の調査を行い、箱式石棺墓を主体とする古墳時代前期の墓域が確認されました。平成2・3年には支石墓に伴う居住域の確認調査を実施したところ、縄文時代後期の貝塚などが確認されました。

平成4(1992)年には1次調査地点を町史跡に指定し、平成5年に「新町遺跡展示館」を設置して、覆屋内部に遺構の復元展示を行いました。

その後、平成12(2000)年度に国の史跡指定を受け、平成19～平成28年度にかけて指定地の公有化事業を実施し、ほぼ全域の買い上げを達成することができました。

令和元(2019)年度には史跡の恒久的な保存と、未来への継承、学校教育・生涯学習・観光等さまざまな面での活用を促進するために、『国史跡新町支石墓群保存活用計画』を策定しました。



図1 新町集落上空から可也山を望む(中央やや左が新町支石墓群)



図2 新町支石墓群全景

## 2. 支石墓の分布と種類

支石墓は主に中国東北部から朝鮮半島、西北九州にかけて分布します。上石を複数の支石で支える構造を基本とし、その形態によって大きく二種類に分類されています。

遼東半島から朝鮮半島北部にかけては、巨大な上石を板石をたてた支石で支えるものが多く、その形状がテーブルに似ていることから卓子形と呼ばれています。また、分布の中心が北部に偏るため北方式といわれることもあり、埋葬施設は地上に設けられます。

一方、朝鮮半島南部から西北九州にかけては支石の低い墓が多く、形状から碁盤形と呼ばれています。分布域が南部にあるため南方式ともいわれ、埋葬施設は地下に設けられます。ただ、朝鮮半島においては多くが石室であるのに対し、九州の支石墓は木棺・甕棺・石棺・土壙など種類が豊富であることが特徴です。

## 3. 糸島の支石墓

縄文時代晩期後半に稲作を中心とする新しい文化が大陸から朝鮮半島を経由して日本列島へ伝えられ、弥生時代が始まります。この時に支石墓も伝来し、日本では主に九州西北部に分布し、糸島から唐津、松浦、平戸周辺の玄界灘沿岸地域や島原半島周辺、脊振山系南麓などで確認されています。

なかでも糸島市は支石墓の集中する地域であり、主なものとして、新町支石墓群のほか、志登支石墓群や井田用会支石墓、三雲石ヶ崎支石墓、三雲加賀石支石墓、長野宮ノ前遺跡、石崎矢風遺跡などがあり、その分布から水系及び小平野ごとに支石墓が展開していることが分かります。

また、井田用会支石墓や三雲石ヶ崎、三雲加賀石などはほかの支石墓と比べて大型です。この辺りはその伊都国王都として繁栄した三雲・井原遺跡の北辺

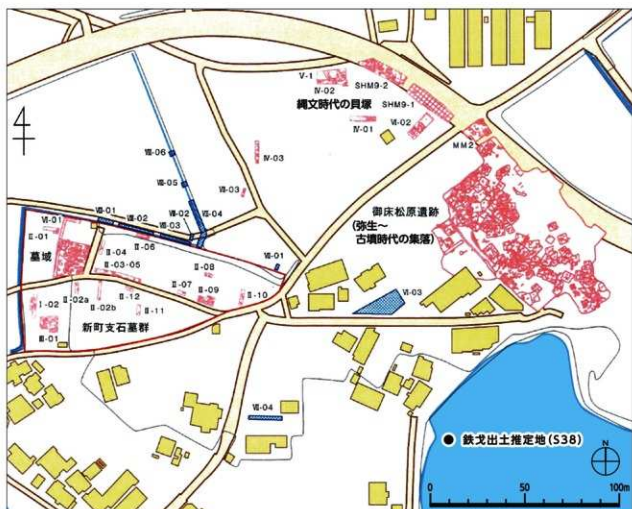


図3 新町・御床松原遺跡周辺の遺構分布図(1/2000)

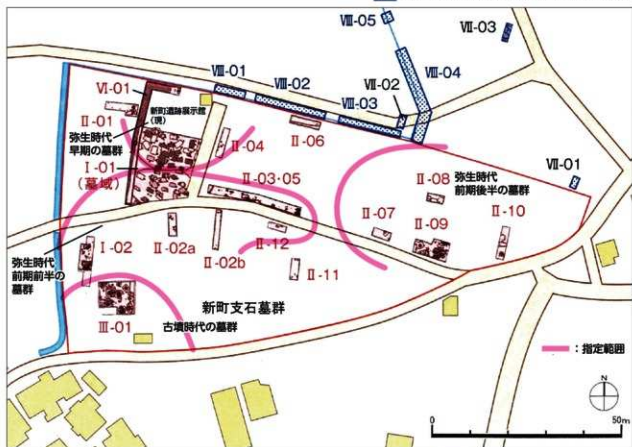


図4 新町支石墓群の調査地点(1/1000)



図5 糸島の支石墓

①志登支石墓群 ②新町支石墓群13号墓 ③井田用会支石墓 ④三雲石ヶ崎支石墓 ⑤石崎矢風支石墓 ⑥長野宮ノ前支石墓



図6 志登支石墓群の発掘調査風景(昭和28年度)



図7 糸島における主な支石墓の分布

に所在することから、弥生時代開始期において、墓の造営に多くの人々を動員できる実力をもつ人物がいたことが想定されます。

なお、主体部から副葬品が出土することは稀ですが、糸島の支石墓からは、打製石鏃、柳葉形磨製石鏃、碧玉製管玉などが出土しています。これらはムラのリーダーなどの有力者を葬ったものと考えられています。

#### 4. 支石墓調査の歴史

わが国の支石墓調査は糸島から開始されました。

戦後すぐの昭和22(1947)年に原田大六氏が三雲石ヶ崎支石墓の調査を行い、副葬品として碧玉製管玉を確認します。その後、昭和28(1953)年には文化財保護委員会(現在の文化庁)による志登支石墓群の調査が行われ、支石墓10基、甕棺8基を確認し、4基の



図6 新町支石墓群第1地点調査区全景(昭和61年度)

支石墓と8基の甕棺が調査されました(図6)。なお、この段階から支石墓の保存を前提とした調査が行われており、埋め戻しに際しても上石の上半分が露出するように配慮されています。翌年には国史跡に指定され、公有化され保存されています。

このように糸島の支石墓は調査とともに保存が進められ、現地に残すことができない場合は移設するなど、支石墓を後世に伝えていく取り組みが続けられています。

このような状況のもとに新町支石墓群の調査が開始されます。

## 5. 新町支石墓群の調査

新町支石墓群は可也山の西側、引津湾に面した砂丘上に築かれた墳墓群です。先述したとおり、大正年間

から土器散布地として知られた遺跡で、昭和61(1986)年から本格的な発掘調査が実施され、弥生時代早期～前期前半の支石墓などからなる墓域が確認されました。以後、現在の史跡用地内と周辺を含めて合計10回にわたる範囲確認調査が実施され、遺跡の東側に弥生時代前期前半～後半の墓域が広がり、南側の砂丘裾には甕棺墓や箱式石棺墓が展開する南北80m、東西140mの墓域が確認されました。

この調査では57基の墓が確認され、その約1/3が支石墓と考えられています。支石墓の主体部まで調査したものはその約半数で、残りは今も現地で保存されています。また、副葬小壺を伴うものが多く、墓が築かれた時期が特定しやすいことも新町支石墓群の特徴といえます。





図9 新町支石墓群 支石墓検出状況

①5号支石墓 ②5号支石墓副葬小甕出土状況 ③9号支石墓 ④9号支石墓副葬小甕 ⑤11号支石墓 ⑥11号支石墓副葬小甕



圖10 新町支石墓群 支石墓・壘棺檢出狀況

①9号墓壘墓・支石檢出狀況 ②9号墓人骨出土狀況 ③18号墓 ④19号墓人骨出土狀況 ⑤13号支石墓 ⑥13号支石墓副葬小壘出土狀況



図11 新町支石墓群出土弥生時代早期土器群

## 6. 稲作農耕文化導入の主体者

新町支石墓群では合計17体の人骨が確認されました。墳墓が砂丘上に築かれたことから人骨の残りもよく、これらを分析すると大きな成果ができました。

まず、成人は木棺、乳幼児は壟棺に埋葬されていることが明らかになりました。朝鮮半島では支石墓の主体部は石室であることが多く、日韓における主体部の形態差が目されました。また、人骨は低顔・低身長で風習の抜歯痕が認められることから、新町支石墓群の被葬者は縄文人的特質をもつことが分かりました。

このように渡来系の墓制である支石墓の被葬者が縄文人の特徴を色濃く残す人物であったことは特筆すべきことで、これまで日本列島における稲作農耕文化は渡来人がもたらしたと想定されていましたが、新町支石墓群の調査成果から受け入れの主体者が北部九州の人々であったと考えられるようになりました。

## 7. 最古の戦死者

24号墓は長さ173cm、幅98cmを測る木棺墓で、支石墓の可能性のあるものです。弥生時代早期の副葬小壺をもつこの墓には成人男性が両手を腰部に重ね、膝を屈した仰臥屈肢の姿勢で東側に頭を向けて葬られていました。この被葬者の左大腿骨付け根には柳葉形磨製石鏃が突き刺さり、骨には治癒反応が全くないことから、被葬者は戦闘により死亡した可能性が高く、戦死者の墓といえます。

また、被葬者の足元には小さな土坑があり、中から少年～若年のものと思われる歯が出土していることから別人の首を納めたものと判断されています。

日本では弥生時代早期の人骨出土例はほとんどなく、鏃が突き刺さった状態の出土例はないことから、24号墓の被葬者は日本最古の戦死者の墓といえます。



図9 新町支石墓群で確認された甕棺・副葬小壺

①第1地点 18甕棺下壺 ②新町Ⅱ-01 1号墓 甕棺 ③45号墓副葬小壺 ④39号墓副葬小壺 ⑤48号墓副葬小壺  
⑥49号墓副葬小壺

### 24号墓人骨出土状況

頭位を東に向け、膝を屈する。  
頭には水銀朱を塗布する。  
右手の下からは柳葉形磨製石鏃の  
破片が出土。



### 柳葉形磨製石鏃刺突状況と X線写真

石鏃は左大腿骨頸部に刺さり、刺突  
時の衝撃で先端部はつぶれている。  
石鏃は13.0cm前後に復元される。



### 24号墓完掘状況

下肢骨の下に51×28cm、深さ22cm  
の腰坑(土坑)を確認。中から少年～  
若年の上顎切歯片が出土した。



図13 24号墓関連写真

## 新町支石墓群 弥生時代早期・前期 墳墓一覧

名 前	調査	地点名	時期	形 態	上石の有無	支石の有無	土器層	副葬品	埋葬者	備 考	出 典
1号墓	1次調査	第1地点	弥生前期	支石墓	○	○	未掘	小甕1	—	小甕片はあるが1号墓に 伴うか不明。	志摩町7(1967)
2号墓	1次調査	第1地点	弥生前期	支石墓	○	○	未掘	小甕3	—	主体部は覆土をうけ、 上石を削って埋める。 小甕は覆土より出土。	志摩町7(1967)
3号墓	1次調査	第1地点	弥生前期	支石墓	○	○	未掘	—	—	—	志摩町7(1967)
4号墓	1次調査	第1地点	弥生前期	支石墓	×	○	未掘	小甕2	—	—	志摩町7(1967)
5号墓	1次調査	第1地点	弥生前期	支石墓	○	○	未掘	小甕1	—	—	志摩町7(1967)
6号墓	1次調査	第1地点	弥生前期	支石墓	×	○	未掘	小甕1	—	—	志摩町7(1967)
7号墓	1次調査	第1地点	弥生前期か	不明	×	×	未掘	—	—	—	志摩町7(1967)
8号墓	1次調査	第1地点	弥生早期	支石墓	×	○	未掘	小甕1	—	—	志摩町7(1967)
9号墓	1次調査	第1地点	弥生前期	支石墓	○	○	未掘	小甕1	男性(青年)	—	志摩町7(1967)
10号墓	1次調査	第1地点	弥生前期	支石墓	×	○	未掘	小甕1	—	—	志摩町7(1967)
11号墓	1次調査	第1地点	弥生前期	支石墓	○	○	未掘	小甕1	男性(成年)	—	志摩町7(1967)
12号墓	1次調査	第1地点	弥生前期	不明	×	×	未掘	小甕1	不明(成年)	墓標。	志摩町7(1967)
13号墓	1次調査	第1地点	弥生早期	支石墓	○	○	未掘	小甕1	—	—	志摩町7(1967)
14号墓	1次調査	第1地点	弥生前期	支石墓	×	○	未掘	小甕1	—	—	志摩町7(1967)
15号墓	1次調査	第1地点	弥生前期	支石墓	○	○	未掘	小甕1	女性(成年)	—	志摩町7(1967)
16号墓	1次調査	第1地点	弥生早期	支石墓	×	○	未掘	小甕1	女性(成年)	—	志摩町7(1967)
17号墓	1次調査	第1地点	弥生前期	木棺墓	×	×	未掘	小甕1	—	—	志摩町7(1967)
18号墓	1次調査	第1地点	弥生早期	横棺墓	×	×	掘出	なし	不明(幼年)	—	志摩町7(1967)
19号墓	1次調査	第1地点	弥生早期	支石墓?	?	?	木棺	浅鉢1	男性2 (青年+成年)	赤色顔料(水銀朱)、 墓壁上に赤石あり、上石の破片、 支石の可能性。	志摩町7(1967)
20号墓	1次調査	第1地点	弥生早期	横棺墓	×	×	掘出	小甕1	—	—	志摩町7(1967)
21号墓	1次調査	第1地点	弥生早期	木棺墓	×	×	未掘	なし	—	墓標。	志摩町7(1967)
22号墓	1次調査	第1地点	弥生前期	支石墓?	?	?	木棺	小甕1	不明(成年)	墓壁上に赤石あり。 上石破片、支石の可能性。	志摩町7(1967)
23号墓	1次調査	第1地点	弥生早期	木棺墓	×	×	木棺	小甕1	—	—	志摩町7(1967)
24号墓	1次調査	第1地点	弥生早期	支石墓?	×	?	木棺	小甕2	男性2 (青年+少年一若年)	墓標もしくは支石、赤色顔料 (水銀朱)。1号人骨大塚内に 短形土器製石楕圓入。 楕圓に2号人骨(頭)。	志摩町7(1967)
25号墓	1次調査	第1地点	弥生早期	横棺墓	×	×	掘出	小甕1	—	—	志摩町7(1967)
26号墓	1次調査	第1地点	弥生前期か	不明	×	×	不明	なし	—	—	志摩町7(1967)
27号墓	1次調査	第1地点	弥生早期	不明	×	×	不明	小甕1	—	—	志摩町7(1967)
28号墓	1次調査	第1地点	弥生前期か	不明	×	×	未掘	なし	—	—	志摩町7(1967)
29号墓	1次調査	第1地点	弥生前期か	木棺墓	×	×	未掘	なし	—	—	志摩町7(1967)
30号墓	1次調査	第1地点	弥生前期か	不明	×	×	未掘	—	—	—	志摩町7(1967)
31号墓	1次調査	第1地点	弥生前期か	不明	×	×	不明	なし	—	墓標。	志摩町7(1967)
32号墓	1次調査	第1地点	弥生前期か	不明	×	×	未掘	—	—	—	志摩町7(1967)
33号墓	1次調査	第1地点	弥生前期か	不明	×	×	未掘	小甕1か	—	33号墓に伴うか不明	志摩町7(1967)
34号墓	1次調査	第1地点	弥生早期	木棺墓	×	?	未掘	小甕1	—	—	志摩町7(1967)
35号墓	1次調査	第1地点	弥生早期	不明	?	?	未掘	小甕1	—	—	志摩町7(1967)
36号墓	1次調査	第1地点	弥生前期	不明	×	×	未掘	—	—	—	志摩町7(1967)
37号墓	1次調査	第1地点	弥生前期か	不明	×	×	未掘	—	—	—	志摩町7(1967)
38号墓	1次調査	第1地点	弥生早期	支石墓	×	○	木棺?	小甕1	不明(成年)	—	志摩町7(1967)
39号墓	1次調査	第1地点	弥生早期	不明	×	?	未掘	小甕1	—	墓標。	志摩町7(1967)
40号墓	1次調査	第1地点	弥生前期か	不明	×	×	未掘	—	—	—	志摩町7(1967)
41号墓	1次調査	第1地点	弥生前期か	不明	×	×	未掘	—	—	—	志摩町7(1967)
42号墓	1次調査	第1地点	弥生前期か	支石墓	×	○	未掘	なし	—	—	志摩町7(1967)
43号墓	1次調査	第1地点	弥生前期か	支石墓	○	○	未掘	—	—	墓標。	志摩町7(1967)
44号墓	1次調査	第1地点	弥生前期か	支石墓	○	○	未掘	—	—	—	志摩町7(1967)
45号墓	1次調査	第1地点	弥生早期	不明	×	?	未掘	小甕1	—	—	志摩町7(1967)
46号墓	1次調査	第1地点	弥生前期か	不明	×	×	未掘	—	—	—	志摩町7(1967)
47号墓	1次調査	第1地点	弥生前期か	不明	×	×	不明	なし	—	—	志摩町7(1967)
48号墓	1次調査	第1地点	弥生前期	不明	×	×	不明	小甕1	—	—	志摩町7(1967)
49号墓	1次調査	第1地点	弥生前期	木棺墓	×	×	未掘	小甕1	—	—	志摩町7(1967)
50号墓	1次調査	第1地点	弥生前期	横棺墓	×	×	掘出	なし	—	覆土から管玉。	志摩町7(1967)
51号墓	1次調査	第1地点	弥生前期か	木棺墓	×	×	未掘	なし	—	—	志摩町8(1988)
52号墓	2次調査	第1地点	弥生早期	木棺墓	×	?	未掘	なし	—	—	志摩町8(1988)
53号墓	1次調査	第1地点	弥生前期か	不明	×	×	不明	管玉2	不明(成年)	—	志摩町7(1967)
54号墓	1次調査	第1地点	弥生前期か	不明	×	×	未掘	—	—	—	志摩町7(1967)
55号墓	1次調査	第1地点	弥生前期か	石甕1	×	×	石甕1	なし	—	—	志摩町7(1967)
56号墓	1次調査	第1地点	弥生早期	不明	×	×	不明	小甕1	—	—	志摩町7(1967)
57号墓	1次調査	第1地点	弥生前期	木棺墓	×	×	未掘	なし	—	—	志摩町7(1967)
1号墓	2次調査	Ⅱ-01	弥生早期	横棺墓	×	×	掘出	なし	—	—	志摩町8(1988)
2号墓	2次調査	Ⅱ-01	弥生前期か	支石墓	×	×	未掘	—	—	上石は破壊か。 墓標。	志摩町8(1988)
1号墓	2次調査	Ⅱ-02a	弥生前期	不明	×	×	未掘	小甕1	—	—	志摩町8(1988)
2号墓	2次調査	Ⅱ-02a	弥生前期	不明	×	×	未掘	小甕1	—	—	志摩町8(1988)
1号墓	2次調査	Ⅱ-02b	弥生前期	土甕墓	×	?	土甕	小甕1	—	—	志摩町8(1988)
1号墓	2次調査	Ⅱ-03・05	—	支石墓?	○	×	未掘	—	—	覆土に支石墓上石を削り 埋めたか。	志摩町8(1988)
2号墓	2次調査	Ⅱ-03・05	弥生前期	支石墓	×	○	未掘	小甕1	—	—	志摩町8(1988)
3号墓	2次調査	Ⅱ-03・05	弥生前期	土甕墓	×	×	未掘	小甕1	—	—	志摩町8(1988)
4号墓	2次調査	Ⅱ-03・05	弥生前期か	支石墓	○	○	未掘	—	—	—	志摩町8(1988)
5号墓	2次調査	Ⅱ-03・05	不明	不明	×	×	未掘	—	—	—	志摩町8(1988)
1号墓(乳児)	2次調査	Ⅱ-03・05	弥生前期	横棺墓	×	×	掘出	なし	不明(乳児)	—	志摩町8(1988)
2号墓(乳児)	2次調査	Ⅱ-03・05	弥生前期	横棺墓	×	×	掘出	なし	不明(乳児)	—	志摩町8(1988)
未記載	2次調査	Ⅱ-04	弥生前期か	支石墓	×	○	未掘	—	—	—	志摩町8(1988)
1号墓	2次調査	Ⅱ-09	弥生前期	横棺墓	×	×	掘出	なし	—	—	志摩町8(1988)
2号墓	2次調査	Ⅱ-09	—	—	×	×	—	—	—	—	志摩町8(1988)
3号墓	2次調査	Ⅱ-09	弥生前期	横棺墓	×	×	掘出	—	—	—	志摩町8(1988)
4号墓	2次調査	Ⅱ-09	弥生前期	横棺墓	×	×	掘出	—	—	—	志摩町8(1988)
5号墓	2次調査	Ⅱ-09	弥生前期	横棺墓	×	×	掘出	なし	—	—	志摩町8(1988)
58	6次調査	Ⅱ-01	弥生早期	木棺墓	×	×	未掘	なし	不明(不明)	—	志摩町26(2006)

墓の数→76基 横棺墓の数→10基 支石墓の数→26基 人骨の数→17体

## おわりに

これまで新町支石墓群の調査成果を中心に紹介してきましたが、このほかにも糸島市には古い時代から新しい時代までの遺跡が、豊かな自然の中に数多く残されています。これらは糸島市だけでなく国民共有の貴重な財産であるといえ、今後も保存と活用を進めていく必要があります。

(平尾和久)

## 【参考文献】

- 横口達也編1987「新町遺跡」志摩町文化財調査報告書第7集  
 横口達也編1988「新町遺跡Ⅱ」志摩町文化財調査報告書第8集  
 小池史哲編1990「新町遺跡Ⅲ」志摩町文化財調査報告書第11集  
 河村裕一郎編1991「新町遺跡Ⅳ」志摩町文化財調査報告書第14集  
 河村裕一郎編1992「新町遺跡Ⅴ」志摩町文化財調査報告書第16集  
 河村裕一郎編2006「新町遺跡Ⅵ」志摩町文化財調査報告書第26集  
 河合修編2020「新町・御床松原遺跡」糸島市文化財調査報告書第2集

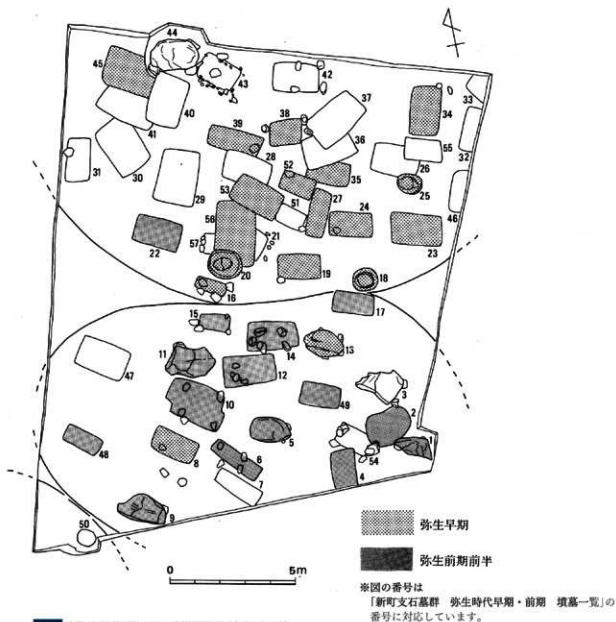
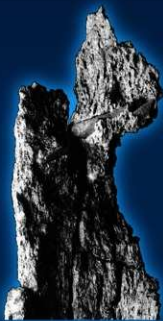


図14 新町支石墓群第1地点遺構配置図(縮尺1/150)



発行日 令和3年1月22日  
発行者 糸島市教育委員会  
〒819-1192  
福岡県糸島市前原西一丁目1番1号  
Tel: 092-332-2093(文化課)  
印刷 株式会社重富印刷